
もしも翼があったなら

連

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もしも翼があつたなら

【Nコード】

N9455Y

【作者名】

連

【あらすじ】

あの、突然ですが、あの名曲「翼をください」ってなんかおかしくないですか？

私はおかしいと思うんす。

やっぱりあなるとこうなるんじゃないでしょうか……。

あの曲はそこまで責任を持つてくれるのでしょうか？

「はあ、やっぱりウイングの新曲はいいわねえ」

紀羅々は教室で溜息をついた。放課後の休み時間、紀羅々は今、売れに売れているバンド、『ウイング』の新曲、『僕に翼があつたなら』に夢中になっていた。

「またあ、キララ。もうその話やめてよ」

親友の絵梨が別の意味で溜息をつく。

「毎回毎回こっちは聞き飽きてるんだって。ウイングなんてつままないわよ。早く卒業して、ちゃんと受験のこと考えたら？」

現実路線の絵梨は、勉強に集中していい高校に入学することが大事だと紀羅々に説く。しかし夢見がちの中学生紀羅々には、それが親の説教と同じものにしか聞こえなかった。

「つままないこと言ってるのは絵梨よ。あたしの親かつーの！絵梨だって、少しは男に夢見ないと、将来つままないのに引っこかるわよ！」

「それでけっこうよ」

絵梨は机の上にあつた国語の教科書をパラパラとめくった。

「ほらまたそんなことする！勉強と親友の話と、どっちが大事なの！」

「『どっちが大事なの』とかいう言い方は、ちゃんとした男の人は嫌いなはずよ」

「う！このお……！」

紀羅々はいつも現実を突きつけてくるこの親友に悔しさを覚えていた。中学生というのは、ちょうど夢を見たい年頃なのだ。それを否定されることに対して紀羅々は憤慨していた。

「ま、いいのよ。こういう現実の辛さをウイングは癒してくれるのよ。僕の背中に」 ああ、翼があつたなら」

「ちよつとやめてよ、恥ずかしい！あんたの声、美声だから余計

恥ずかしいのよ！」

「あたしの声を馬鹿にするのはやめてよ！」

二人の会話は毎度毎度こういうものだった。クラスの女子はそんな二人に「仲いいねえ」とよく言っていた。

翼がほしい。

どこまでもどこまでも飛んでいけるような。

そう思うのだ。

家に帰った紀羅々は、毎日ウイングのプロモーションビデオを見る。ボーカルのケイは、このバラードを切々と歌い上げる。バックのメンバーもその穏やかな音色を哀しくも美しく表現していた。

紀羅々は幻想の世界にどっぷりはまっていた。そしてその夜にはウイングの夢を見たのだった。

イントロが鳴り響く。曲が始まる。ケイが透明な声で歌い始め、メンバーの奏でる音は細やかに絡み合ってゆく。

そして真っ白な天使が舞い降りてくるのだ。ケイはその天使に向かってサビの部分を書いた。

「僕の背中に、ああ、翼があつたなら」

柔らかな手で天使はケイの頬にそっと触れる。するとメンバー全員に真っ白な翼が生えた。ウイングはさらに熱く演奏し熱唱する。そして天使と共にきらめく紫色の空に舞い上がっていくのだった。

ウイングのプロモーションビデオの夢だった。いい夢を見た。窓から光が差し込む。雀もちゅんちゅん鳴いている。いい朝だと思った。

のもつかの間。なんだか首の辺りがやけに苦しい。なんだろう。そう思ったら紀羅々は首に手をやった。

触ってみると、パジャマの首の部分が自分の首を絞めているようなのである。紀羅々は焦ってパジャマの前ボタンをはずした。そし

て起き上がりかけたその時。

「え？」

重いのである。体がやけに重い。動かないのだ。

「なにになに？」

紀羅々の頭はパニックになった。金縛り？ いや、でもボタンははずせたはずだ。紀羅々は勢いをつけて頑張って起き上がって見た。すると。

「バサ……」

変な音がしたのである。

「なに、『バサ』って……」

背中に違和感を感じた。それはものすごく嫌な予感をよぎらせた。首をゆつくりと後ろへ回してみる。そこにあつたものは……。

『翼』であつた。紀羅々の背中には立派な翼が生えていた。

「ぎゃあ——！」

その大声で近所の犬がわんわんとほえ始めた。

「どうしたの、キララちゃん！」

二階にある紀羅々の部屋に飛んできたのは、一階の台所でお弁当を作っていた母だつた。母親は紀羅々の真っ白な翼を見て「あらあゝ」と頬に手を当てた。

「どうしよう……。どうしよう、お母さん」

紀羅々は半べそをかいている。母親は「うゝん」と首をかしげてからこう言つた。

「ほら、キララちゃん、ウイングみたいな鳥人間になりたいって言つてたじゃない」

「誰が鳥人間よ！」

紀羅々は涙がすつ飛ぶほどの勢いでツッコんだ。

「これ！ この翼、どうしようって言つてんの！」

「そっねえ」

母は辺りをきょろきょろと見回した。

「あつたあつた。これよ」

そう言つて母親は机の上にあつたペン立てからハサミを取り出した。

「ちよつとやめてよ！ ハサミつてどういふことよ！」

「いやあね、冗談よ、ホホホ」

笑つた母親はハサミをペン立てにシュツと投げた。

「ガラガラガツチャーン！」

ハサミは当然入らなかつた。

「そういう当たり前のミス、しないでくれる！」

そんなやりとりをしているところに、一階に寝ていた父親がのっそりと階段を上がつてきた。

「おおい、キララ。朝から何叫んどるんだ？ お、翼が生えたのか？」

「そつよ、お父さん、どうすればいいの？」

紀羅々はまた涙ぐんだ。父親は背中の翼に顔を近づけた。

「あ、翼つて臭くないんだ」

「臭くないわよ！」

紀羅々の涙はまたもや吹っ飛んだ。

紀羅々の家族はのんきに朝食を食べている。しかし、のんきに食べているのはもちろん父と母だけだ。紀羅々は息も絶え絶えに階段を降りてきて、やっとテーブルについたところだった。

「はい、野菜ジュース」

母親は毎朝の一杯を出してくれた。それをなんとかごくりと飲み込む。紀羅々は毛布を羽織っていた。普通の服が着れないからだ。

「まったく、どうしてこんなもんが生えてきたのかしら」

紀羅々はげんなりした。

「パンと目玉焼きは食べる？」

母親が聞いてきた。

「いらないわ」

すると父親がこう言った。

「まあそう落ち込むな。とりあえず様子を見てみたらどうだ？　気晴らしに絵梨ちゃんにでも電話するか？」

「絵梨ね……」

紀羅々の頭には自分の話を思い切り不信がる絵梨の顔が浮かんだ。でもわらをもつかむ思いだ。突破口はもしかして絵梨が握っているのかもしれない。そう思って、紀羅々は自分の部屋から携帯で絵梨に電話した。

「はい、もしもし」

「あ、あたしよ、キララよ」

「わかるわよ、その変な声で」

相変わらずかわいくない奴だ。紀羅々は相談するのをためらった。しかし、いい案がふと浮かんできた。

「実はさ、昨日家で骨折しちゃったのよ。だから登校すんの手伝ってくれない？」

鞆持ちやってほしいんだ」

絵梨は驚いた声を出した。

「え！　あんたが骨折！　分かった。すぐ行くから」

紀羅々はほつとした。ここに心の友がいた。絵梨にならすべてを打ち明けられるわ！　そう思ったのである。

十五分後、絵梨が紀羅々の家に到着した。そして翼を見ての第一声はこんなものだった。

「なんのおふざけ？」

絵梨が顔をしかめた。セーラー服から出た細い足は大股に開かれてこちらを威圧している。

「たしか骨折してるって言ってたわよねえ。あれは何？　ついでにそれは何？」

「骨折っていうのは嘘だけど、とにかく来てほしかったのよ！　聞いてよ、朝起きたらこんな変なものが生えていたのよ！　これ、どうしたらいいの！　背中にくっつくついているのよ！」

想像した通りの不信顔になった絵梨は、「ふ〜ん」と言って紀羅々の背後に回った。そして。

「せーの！」

「え？ イイイイデデデデ！」

絵梨は翼を思いつきり引っ張った。紀羅々は涙をこぼした。

「嘘……。本物……」

「だっつーの！」

やっとのことで事は前に進みそうだった。

とりあえず医者に行くことになった。紀羅々と母親は救急車で。父親と好奇心一杯の絵梨はタクシーで病院に向かった。もちろん、救急隊員は目をパチクリさせていた。

救急病棟の待合室で揃った四人は翼について話し合った。

「すごいわね。こんなの本当に生えるんだ。ウイングのプロモーションビデオみたいね」

絵梨は紀羅々宅に遊びに来た時、一度ウイングのDVDを見せられている。それで覚えていたのだ。紀羅々は正直、ウイングを憎んでいた。ウイングの夢を見た朝、こうなっていたからだ。

「ほらあ、翼がほしいなんて言うからこうなっちゃったんじゃないの？」

母が顔に手を当てた。

「実際に翼が生えたら、こんなにも必死に取りたくなるもんなんだな」

はあ〜と父が感心した。

「あたし、これからどうすればいいのお〜？」

涙目になった紀羅々だったが、なぜか絵梨は笑っていた。

「なんか可笑しいわね。あんだ、本当にウイングみたいになっちゃうんだもの」

それを聞いた母が笑い出した。

「ほんとね。ずっと言ってたものね」

父も笑い出した。

「なんかバカみたいだぞ？」

「バカとは何よ！」

やはり紀羅々の涙は吹っ飛んだ。周りはこんな人間ばかりだと紀羅々はぷりぷり怒っていた。すると、一人の看護師がこちらに近づいてきた。

「星さん、どうぞ」

『星』とは紀羅々の苗字である。

「ぶはっ！ 星キララ！」

父親が吹き出した。

「お前が付けたんだっつーの！」

紀羅々はもう悲しみの感情がどこかへいったような気分だった。

紀羅々の後について三人も病室に入った。そこに座っていたのはスマートな黒縁眼鏡をかけた若い男の医者だった。

「で、どうしました？」

紀羅々は恥ずかしそうに、毛布を背中の部分だけ下ろしてくるりと後ろを向いた。

「ほほう……」

医者は興味深そうに翼を眺めた。手を眼鏡に当てている。

「先生、これは一体なんなんでしょうか？」

その問いには答えず、医者は「触っていいですか」と聞いてきた。質問に答えるよと紀羅々は思ったが、大人しく「はい」と小さくうなずいた。

医者はそつと翼に触れた。ピクリとも動かない。そして。

「せーの！」

「え？ イイイイデデデデ！」

医者は冷静に言った。

「取れませんか」

「だから来たんだっつーの！」

紀羅々はさつきから怒ってばかりだった。誰かまっとうに悲し

ませてほしい。不思議とそんな変な気持ちになっていた。

しかし、ここで意外な事実が判明したのである。

「実はね、この症状、星さんだけではないんです」

「え！」

全員が声を揃えた。

「ほんとですか、先生！ ほかに誰がいるんですか！」

紀羅々は医者に詰め寄ったが、また冷静にこう答えた。

「いや、誰とは言えませんがね。実はこれは遺伝子が原因なんです」
「遺伝子？」

「そうです。実はごくまれに『翼が生える遺伝子』を持った人間が現れるんですよ。それで普段は普通の人間として過ごしているのですが、何かのキツカケで突然それが生えてくるという現象が今、日本で二件起こっているんです」

「翼が生える遺伝子……。二件……」

紀羅々はフアンタジーの世界から一気に現実的な感覚に引き戻された。そして今日夢に見たウイングのことがまた頭をかすめた。

「何かキツカケはありませんでしたか？」

その問いに紀羅々は夢のことを話した。そして今までずっと翼がほしいと思っていたことも。

「なるほど、そうでしたか……。ほかの二件と同じような理由ですね」

「同じ、ですか……」

「正直、その辺りは僕もまだ詳しくないのでなんとも言えませんが

……」

医者は少し沈黙して間を空けた。そしてゆっくりと口を開いた。

「それと、大変言いにくいのですが……」

「はい……」

紀羅々は構えた。家族と絵梨も緊張した。

「いわゆる翼人間というのは、一種の奇形なんです」

「き……」

紀羅々の顔が凍った。今なんて言った？ この先生はなんて言った？

「聞こえました？ 奇形なんです。奇形。奇形奇形奇形奇形奇形」
「そんなに言わなくつても分かるっつーの！」

さつきからなんなんだ、この連中は！ 分かっているのか、事の重大さを！「じゃ、じゃあ、どうすればいいのですか？」

黙っていた母親が尋ねた。

「手術ですね。バツサリといきます。たぶん、跡も残りますね」

「ガ——ン！」

残酷な医者言葉に紀羅々は頭が真っ白になってその場に倒れた。

「まあ、世の中は変なものが流行るものね」

絵梨は紀羅々宅でアイドルの雑誌を開いていた。そこには白い翼が生え揃った可愛い顔の三人組が写っていた。

「ま、開き直ればこんなもんよ」

翼をバサバサと動かしながら紀羅々はベッドに座って足を組んでいた。訓練で動かせるようになったのだ。絵梨は机に肘をついて、

「ふっ」と息を漏らした。

「まさか、友人が芸能人になるとはね。しかも珍獣系」

「あ、それ褒め言葉？」

「別に」

高校生になった絵梨は、この友人のある種の快拳を心の中で称えずにはいらなかった。なんというか、お見事というか。

「よくあそこで決断しなかったわね」

「ああ、手術」

「そう」

すると紀羅々は「何言ってるの」と腕を組んだ。

「たいそれたことじゃないって教えてくれたのはあんたたちじゃん！ 絵梨もお母さんもお父さんも先生も、みーんなあたしをからか

ったでしょ？」

「あれは励ましたっていうのよ」

「からかった！」

紀羅々はぷくりとふくれた。

「あ、そのショットいただき」

「ほら、またあ！……ま！だから、そういうことなのよ！た
いしたことじゃないじゃんって思ったんだ。だから利用しようって」

「へー、また前向きな」

ベッドからトンと下りてきた紀羅々は晴れやかな笑顔でこう言っ
た。

「じゃ、私たちのデビュー曲、歌いまーす！」

「いいわよ、別に」

紀羅々はミニスカートから見える白い足を大きく広げ堂々と立っ
た。手はマイクを持つフリをしている。

「歌うわよ、絵梨への感謝を込めてね！」

美声は部屋に響き渡った。紀羅々たちのデビュー曲、『この翼を
広げたい』はオリコン三位を獲得したのだ。

現実路線を歩む絵梨には、まだやはりピンと来ないお話。でもそ
れでいいかと絵梨はくすりと笑って納得し始めたのだった。

（後書き）

読んでいただいております。

こんなふざけたものを。

でもけっこう気に入ってます。

え？面白くなかったですか？

じゃあ、あなたの背中に臭い翼が生える液を……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9455y/>

もしも翼があったなら

2011年11月28日09時55分発行